＊＊＊

「海の生き物を守る会」メールマガジン　No. 62　　2010.7.1（木）

うみひるも

Association for Protection of Marine Communities (AMCo)

Homepage：http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html

＊＊＊

「今月の海の生き物　メリベウミウシ　*Melibe papillosa*

本州中部以南温帯の浅海に棲む軟体動物後鰓類の一種。体色は黄褐色～淡褐色で色彩変異は大きい。体長 10cm 程度のウミウシ。体表には小さな突起がたくさん備わっており、茶褐色の小さな斑点も見られる。背中に 4～9 対の突起を持つが､触ると簡単に外れてしまうが、簡単に再生する。口の周りに頭巾状のものをもち、それを投網のように大きく拡げてプランクトンを食べる。ウミウシの中ではきわめて変わり者の食性をもつ。他のウミウシのように歯舌を持たない。転石の下などに潜むことが多い。体から独特の臭いを発する。かつて、ヒメメリベ、ムカデメリベ、クロメリベと呼ばれていた 3 種のメリベが一つにまとめられてメリベウミウシという名になったが、最近の研究ではやはり 3 種に分けるべきだという。まだまだ研究の進み方によっては名前が変わる可能性がある。ここでは、メリベウミウシとした。初夏の浅い海にメリベウミウ

シのペアが寄り添っていた。繁殖行動と思われる。ウミウシ類は雌雄同体が多いが、かならず他個体と交尾を行う。交尾はお互いに向き合い、からだの右側面同士を接触させてペニスを相手の生殖孔に差し込んで行われる。交尾後、海草などの上に卵塊を産み付ける。

（千葉県富津沖のアマモ場にて　向井　宏撮影）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

目次　　「今月の海の生き物」メリベウミウシ

１．海の生き物とその生息環境に関するニュース

２．海の生き物を守る会の活動報告

３．海の生き物を守る会の現在の活動と予定

４．海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報

５．事務局便り

６．編集後記

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

1、海の生き物とその生息環境に関するニュース

【国際】

●IWC は決裂　日本政府は将来の捕鯨禁止を拒否

モロッコのアガディールで開催されていた第 62 回国際捕鯨委員会（IWC）の年次総会で、議長が提案した妥協案（沿岸捕鯨を認めるが、南極海の調査捕鯨を段階的に減らし、2020 年度にゼロにする）をもとに議論が続けられたが、日本政府が最終的に捕鯨量ゼロを認めなかったため、合意が得られないとして会期を残したまま事実上決裂した。この議論は来年以降に先送りされる見通し。

【全国】

●低潮線の保全法が成立　狙いは経済水域の確保

参議院の国土交通委員会は、低潮線保全法を成立させた。低潮線保全法は正式には、「排他的経済水域及び大陸棚の保全及び利用の促進のための低潮線の保全及び施設の整備等に関する法律」というが、その名前にあるように、排他的経済水域（EEZ）を確保するために、離島の低潮線が海水の浸食によって後退しないように整備をするのが目的である。日本の EEZ の最南端を決めているのは沖ノ鳥島であるが、沖ノ鳥島は島とは言ってもサンゴ礁の岩が見え隠れする程度の岩礁に過ぎない。日本はこれを島と認めて EEZ を 200 海里この島から設定しているが、中国などは沖ノ鳥島を陸とは認めていない。しかも、沖ノ鳥島は波による浸食や地盤沈下などで消滅の危機にある。EEZ の経済効果を重視する日本政府は、沖ノ鳥島の消滅はなんとしても防止したい考えで、コンクリート製の施設を整備することによって島を浸食から守りたい思惑がある。また、サンゴを移植して陸地の拡大を図ろう

という努力もかなりの多額の予算でなされてきた。この法律は、EEZ を守るために重要な離島を指定し、そこに集中的に予算を計上できるようにする目的があった。この法律の低潮線保全の目的は、環境の保全ではない。

●混獲でミンククジラを 300～500 頭捕獲

日本周辺のミンククジラには二つの個体群が存在する。一つは、オホーツク海・西太平洋系群で、O-stock と呼ばれる。もう一つは、東シナ海・黄海・日本海系群で、J-stock と呼ばれている。この J-stock は個体数が少なく、場所によっては希少な群れになっているところもある。ミンククジラを対象とした商業捕鯨は 1984 年に国際捕鯨委員会 IWC によって禁止されているが、日本周辺では調査捕鯨として北西太平洋枠でミンククジラ 380 頭を限度とした調査捕鯨が釧路などで行われている。この調査捕鯨の対象は O-stock であるが、これとは別に定置網などの混獲によるミンククジラの鯨肉が国内に出回っている。混獲のデータはこれまで公表されてこなかったが、最近日本鯨類研究所が公表したデータから、混獲で流通している鯨肉の約 77%が J-stock であることが読み取れた。「混獲」とされて捕獲されているミンククジラは、年間 120～130 頭にのぼるという。韓国では捕鯨は行われていないが、やはり混獲でかなりのミンククジラが殺されているらしい。

●アカウミガメの産卵報告が次々

ウミガメの産卵シーズンが始まり、日本の各地の浜で産卵のために上陸するアカウミガメが報告されるようになった。今年は、アカウミガメの上陸が例年よりも多くなりそうだ。

静岡県駿河区下島の大浜海岸では、今年 3 回目のアカウミガメの上陸産卵が確認された。静岡市が保護事業を始めた 2003 年以来、3 回の産卵は初めて。

三重県御浜町阿田和の七里御浜海岸では、今シーズン 2 回目のアカウミガメの上陸産卵が確認された。産卵したのは甲長 90cm の雌。午後 8 時半頃から約 30 分かけて産卵し、海へ帰っていった。例年に比べて産卵が確認された時期はやや遅いが、これから本格的に上陸が続くと期待されている。

和歌山県白浜町の五色ヶ浜でもウミガメの上陸後が発見された。白浜町内では昨年 6 月に 5 年ぶりに確認されたが今年は初めて。しかし、産卵したかどうかは不明。

一方、アカウミガメの産卵場としてもっとも有名な徳島県美浜町の大浜海岸では、一晩に 5 頭のアカウミガメが上陸して産卵するなど、今年はかなり産卵に上陸するアカウミガメが多くなっているという。一晩に 5 頭が上陸するのは 16 年ぶりとか。一方で、テレビドラマの影響で観光客も増加しており、その影響も心配されている。

【東北】

●宮古市議選で「豊かな海を守る会」会員が全員当選　議員10名に

青森県六ヶ所村の核燃料再処理工場の操業が及ぼす影響を阻止するために活動している

「豊かな三陸の海を守る会」は、4月25日の岩手県宮古市議会議員選挙に6名の会員（現職5，新人1）を立候補させ、全員が当選した。内訳は自民党系2，民主党系1，共産党2，無所属1。選挙には、「六ヶ所村再処理問題」で活動する岩手県内外の仲間が駆けつけて、再処理工場からの放射能汚染問題を提起して、草の根の運動を繰り広げた。また、選挙後、当選した議員のうち4名が新たに「海を守る会」に加わり、議員数28名の内の合計10名の市議会議員が再処理工場の問題に積極的に取り組むことを表明したことになる。青森県六ヶ所村の再処理工場の操業は、青森県東部沿岸を南下する親潮系水の影響範囲である岩手県や宮城県などの漁業者を中心に反対の声が強まってきている。

●海の環境を川の石磨きで守る？　豊かな海づくり大会で表彰

岩手県一関市大東町大原の下内野自治会では、今年開かれた第 30 回全国豊かな海づくり大会（ぎふ長良川）で環境大臣特別賞を受賞した。下内野自治会は、海の環境を川から守ろうと、地元の砂鉄川で、カジカが生息する清流を取り戻すために、川底の石を磨く「石磨き大会」を毎年開催している。大会では地域を挙げて川底の石に着いている有機物を手作りのタワシで磨いて、清流を取り戻すことに繋げているという。この活動は日本大学の生物資源科学部河野英一教授が指導している。でも、石磨きが清流の復活にどうつながるのか、よく分からない。環境省が表彰したのだから、環境省は評価したのだろうが、その説明を聞きたいものだ。

【東海】

●名古屋港水族館に太地のシャチを搬入　市民が質問状

和歌山県太地町立くじらの博物館で飼育されていた年老いた雌シャチの「ナミ」が、市民の反対にもかかわらず名古屋港水族館に買われて搬入された。シャチの芸を観客に見せるためと言われている中、市民団体の「名古屋港水族館を考えるなかまたち」が、名古屋港水族館管理組合管理者の河村たかし名古屋市長あてに公開質問状を出した。それによると、「ナミ」は推定年齢 27 歳で、名古屋港水族館で以前に飼っていた「クー」の死亡年齢 16 歳を考えると、名古屋港水族館が繁殖研究を目的として購入したというのは、きわめて不自然であること、繁殖相手の雄の入手計画がないこと、これまで名古屋港水族館で繁殖したベルーガやバンドウイルカは自然繁殖であり、人工繁殖の研究計画があるとは思えないことなどから、水族館が述べている購入のための口実は疑問である。結局のところ、いままでと同様に海獣類の芸を見せることしか考えていないのではないだろうか。今回の購入金額は 5 億円と言われているが、野生動物を高額で購入することは密漁を推し進めることにつながりかねない。「考えるなかまたち」は 7 月までに回答を求めている。

【近畿】

●イルカショーを狙い？　京都で水族館建設計画

京都市の JR 京都駅近くの梅小路公園に国内最大の内陸水族館を建設する計画が数年前から具体化し始めている。門川大作京都市長が計画を発表したもので、市の所有する梅小路公園をオリックス不動産に貸し出し、オリックス不動産が水族館を建設・運営するというもの。開業予定は 2011 年の予定だが、京都市民をはじめ、反対運動が盛り上がりを見せているため、先行きはまだ不透明だ。京都市は年間 200 万人の集客を見込み、5 月に設置許可を出した。オリックス不動産は、新江ノ島水族館を建設しており、西の京都と東の江ノ島を拠点として、イルカショーなどを行って集客するのではないかと思われている。予定している規模は、新江ノ島水族館とほぼ同規模とされる。しかし、梅小路公園は京都駅周辺の数少ない緑の施設であり、水族館建設によって交通渋滞が悪化することが予測されるなど、市民の反対は強い。さらに、最近では海獣類を使ったショーは、批判を呼び自粛する傾向にある中で、どのような運営が行われるか、監視が必要である。

●田辺湾でアマモ場の分布を調査　和歌山大院生ら

和歌山県田辺市新庄町の田辺湾鳥の巣と呼ばれる海域で、和歌山大学大学院の大南真緒さんが、アマモの定点観測を行っている。大南さんは、和歌山高専学生だった2004年からアマモ場の研究を始め、和歌山大学大学院に進学してからも、ずっとアマモ場の分布の変化などを調べている。今までの研究では、コアマモが増加し、アマモは減少傾向にあるという。調査には地元の NPO「内の浦湾を良くする会」も協力した。

【中四国】

●日本海クロマグロ資源管理へ共同調査

太平洋産のクロマグロの資源が減少している中で、しっかりした資源管理を求められている。そうしなければ、大西洋・地中海クロマグロのように全面禁漁の声が出かねない状況になりつつある。水産総合研究センター日本海区水産研究所や鳥取県・島根県・石川県などの水産試験場が共同で日本海でのクロマグロの産卵実態を調べ、資源管理へ繋げていこうと言うことになった。日本海ではクロマグロの産卵期である 6～8 月が巻き網による漁期にもあたり、巻き網によるクロマグロ漁獲に批判は強い。休漁期間の設定や漁獲サイズの制限などの資源管理を行うに際して、産卵実態の解明は焦眉の急であるが、日本海でのクロマグロの産卵生態はまだほとんど調べられていない。共同調査は、クロマグロの稚魚を採集したり、成熟度を調べるなど産卵の仕組みや産卵海域の特定などの基礎的な調査となる。

●南ソウル大学生らが日本海漂着ゴミを清掃

鳥取県から福井県までの日本海海岸を巡って、海岸の清掃や環境について学習する日韓学生の活動が行われた。参加したのは、韓国の南ソウル大学と鳥取大学の学生など。日本の

海岸に韓国製のゴミが漂着している問題を巡って環境問題を議論し、実際に海岸で清掃活動を行って理解を深めるのが目的。韓国から26名、日本から40名が参加した。テーマは「海道を行く2010世界の平和と環境を考える研修」。韓国の学生は、ゴミを拾うことによって環境問題に国境がないことを理解できたと話していた。

●アサリがホトトギスのせいで減少？

広島県のアサリの産地である廿日市市大野では、アサリの漁獲が大幅に減少している。漁協の推計によると昨年の2～4割減という。その原因ははっきりしないが、漁業者は二枚貝のホトトギスガイが増加しており、そのせいでアサリが減少したと主張するものもいる。ホトトギスガイの足糸が海底の泥をマット状に固めるため、アサリが窒息死したと漁師は説明する。アサリの漁獲量は最近は毎年のように徐々に減少しているが、特に今年の減少幅は大きいと言う。しかし、専門家はホトトギスガイの増加が原因という説には慎重だ。ほかに温暖化なども影響していると見ている。

●仏人ALTオーフレットさんら　海岸清掃

徳島県鳴門市の鳴門高校に勤務しているフランス人の外国語指導助手（ALT）サラ・オーフレットさんと友人や生徒らが、海岸に山積するゴミを見て、本格的な海岸清掃作業を行っている。鳴門市瀬戸町田尻浜の清掃では、その後ゴミの姿が無くなった。その成果を他の海岸にも広めようと、続いて隣の小池海岸で清掃を開始した。6月19日には50人が参加し、2トントラック4台分のゴミを回収した。さらに他の海岸でも清掃を行う予定にしている。しかし、清掃ボランティアは、環境問題の解決に役立つのだろうか。そうは思えない。清掃活動は一時しのぎでしかないし、本当の解決からはむしろ遠のくだろう。

【九州】

●干拓推進の県が説明会　開門のマイナス面を強調

長崎県の国営諫早干拓事業に関する長崎県主催の説明会が島原市など県内6ヶ所で行われた。長崎県は、これまでも諫早干拓事業を進めてきたこともあり、潮受け堤防の開門調査には反対し続けている。今回の説明会でも、県職員や学者からは、潮受け堤防を開門すると干拓地の農家に被害が出ることや、有明海の生態系の悪化はノリ養殖事業の酸処理が原因、などと県の責任を糊塗する発言があるなどきわめて問題の多い説明会であった。さらに開門すると鳴門海峡よりも早い潮流が発生するなど、脅しともとれる発言もあり、開門を要求してきた漁業者は反発を強めている。いったい長崎県は誰のためにそのような発言を重ねているのだろうか。

●別府市北浜の海岸整備　波返しブロック設置

大分県別府市では、海岸整備事業として別府市北浜に大型波返しブロックの設置を行った。このブロックは、北浜旅館街の海側になる「北浜地区２」と呼ばれる区域の420m の浜の護岸工事の基礎となるもの。現在の整備計画では、護岸を35m 沖合に出し、その間を埋め立てて緑地帯を造るとしている。事業を行っているのは国土交通省の別府港湾・空港整備事務所。この事業は別府港海岸保全施設整備事業という名で行われており、同様な工事を「北浜地区１」「餅ヶ浜地区」「上人ヶ浜地区」でも行っている。海岸整備と称しているが実質は海の埋め立てに他ならない。海の埋め立ては厳に慎むべきだが、このような名の下に、各地で工事が行われている。無駄な公共工事は無くならない。

【沖縄】

●名護市長、現況調査拒否へ　辺野古の生態系など

米軍普天間基地の移設問題に関して、沖縄防衛局が名護市に対して調査の許可申請が出されているが、稲嶺市長は「名護市への代替え基地建設を前提にするなら許可しない」という方針を明らかにした。現況調査の許認可権は沖縄県知事にあるが、知事が許可を与えるためには地元の合意が必要とされており、名護市長が同意しない限り沖縄県は許可を与えることができないはずである。調査の申請は、4 点。(1)普天間飛行場の代替え施設建設の調査、(2)は、河川等への立入、(3)天然記念物現状変更、(4)調査で漁港を利用する許可である。調査は辺野古沿岸、辺野古ダム、大浦湾のマングローブ林などを予定している。

　また、同時に出されていた「特別採捕許可申請書」2 件については、沖縄県が許可を出した。これは名護市の同意は必要なく、漁協の同意で許可を出すことができる。さらに、海生生物調査のための公共用財産使用協議書はまだ提出されておらず、今後出されると予想されるが、名護市長は反対を貫く構えである。

2、海の生き物を守る会の活動報告

●大阪コミュニティ財団の助成終了

大阪コミュニティ財団（東洋ゴムグループ環境保護基金）の助成を受けて昨年から砂浜海岸生物調査を行ってきましたが、助成期間が終わり、このたび大阪コミュニティ財団に報告書を提出しました。砂浜海岸生物調査は、助成が無くなっても今後も継続する予定です。みなさまのいっそうのご協力をお願いすると共に、大阪コミュニティ財団に感謝を申し上げます。

●第1回海の生き物を守る講演会・観察会　南紀白浜で

今年度第1回目の「海の生き物を守る会」講演会および観察会を、6月26日（土）に和歌山県白浜町で実施しました。講師の倉谷うららさんが「ダーウインが愛したフジツボ」と題して、2時間近く、彼女自身が愛してやまないフジツボ類について、熱く語りました。参加者は、遠く横浜や京都、下関からの人たちも含めて18名。

←講演会でフジツボとダーウインについて話す倉谷さん

←久保田信氏の説明で内海富士夫展を見る参加者たち

講演会の後、予定していた海の生き物観察会は、参加者が講演会で話さ

れたフジツボ類を観察しようと意気込んでいましたが、残念ながら強い雨に祟られたため、白浜水族館で開催中の内海富士夫博士生誕100周年記念特別展を久保田信京大准教授の説明で熱心に見て回りました。また、雨にもかかわらず2名は海岸に観察に出かけ、フジツボ類の採集を行いました。カイメンフジツボやケハダエボシガイなどの普段目に付かないフジツボの仲間が採集されました。観察会の参加者は約10名でした。

3、海の生き物を守る会 現在の活動と予定

●第２回講演会と映画会・観察会　北海道厚岸と大黒島で

今年度第2回目の「海の生き物を守る会」講演会は、映画上映会を兼ねて以下の要領で実施します。多くの方の参加をお待ちしています。

日時：2010年7月31日（土）15:00～18:00

場所：北海道厚岸町アイカップ　北海道大学アイカップ自然史博物館

映画：鎌仲ひとみ監督作品「ぶんぶん通信No.1～3」

講演：「瀬戸内海の最後の楽園＝長島の生きものたち」

講師：向井　宏　（海の生き物を守る会代表）

主催：海の生き物を守る会・北海道大学厚岸臨海実験所

参加費：500円

また、翌日は下記の要領で大黒島観察会を行います。

日時：2010 年 8 月 1 日（日）9:00～12:00

集合：厚岸町北海道大学厚岸臨海実験所桟橋　08:50

行き先：大黒島番屋崎付近　北大臨海実験所の新鋭船「みさご丸」で約 15 分

指導：仲岡雅裕（北大厚岸臨海実験所長）・向井　宏（海の生き物を守る会代表）

参加費：500 円　（前日の映画会と共通で 800 円）

用意するもの：長靴、雨具もしくはウインドブレーカーなど。弁当、カメラは必要に応じて。

参加希望者は、事前に向井（090-8563-1501；hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp）まで申し込んで下さい。船には定員があり、先着順に参加を認めます。また、その日の気象によって出航できない場合があります。

なお、今年第 3 回の講演会・観察会は、8 月 28 日（土）に、茨城県大洗の平磯海岸で行います。大洗水族館見学も予定しています。お楽しみに。

4. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報

【関東】

●カンムリウミスズメのヒナ確認！～上関から緊急報告会～

報告：高島みどりさん（「長島の自然を守る会」代表）

ゲストトーク：

小浜治美さん　上関町室津在住の漁師さん。上関原発を建てさせない上関町民の会（幹事）。長島の自然を守る会のフィールドワークの力強い協力者。

森田修さん　柳井市平郡島在住、　アイターンし農業を始める。長島の自然を守る会事務局長、祝島と共に元気な離島つくりを目指す。

日時：2010 年 7 月 3 日（土）13:30～16:30

会場：渋谷消費者センター・セミナー室（2F）（渋谷郵便局裏）

渋谷 1-12-5 TEL：03-3406-7641 http://www.city.shibuya.tokyo.jp/est/shoko.html

資料代：500 円

「長島の自然を守る会」は、上関原発予定地周辺でフィールドワークを長年つづけています。2008 年に国の天然記念物であるカンムリウミスズメを上関沖で確認、さらに今年の春には、カンムリウミスズメのヒナも確認しました。この海域でカンムリウミスズメが営巣・繁殖している可能性が益々高くなりました。海中での餌取り等の模様も映像に収めています。世界でも日本にしか、そして日本中でも約 5000 羽しか生息していない絶滅危惧種・カンムリウミスズメ。上関でくらすカンムリウミスズメたちの映像を通して、この地域の生物多様性の姿をご紹介します。

主催：長島の自然を守る会

賛同団体：（6/23 現在）　ふぇみん婦人民主クラブ、再処理工場を知る会、原子力資料情報室、大地を守る会、ももんがともだちネット、ボイス・オブ・ヒロシマ

問い合わせ・連絡先：原子力資料情報室（担当：澤井・永井）

〒162-0065 東京都新宿区住吉町 8-5 曙橋コーポ 2 階

TEL：03-3357-3800　FAX：03-3357-3801　e-mail: cnic@nifty.com

●漂着物から海ごみ問題へ―今我々にできること

ゲストスピーカー：　藤枝　繁　（鹿児島大学水産学部准教授）

開催日時：7 月 9 日（金）　19：00～20：30（18：30 受付開始）

開催場所：自然環境情報ひろば　丸の内さえずり館

千代田区有楽町 1-12-1 新有楽町ビル 1 F　TEL 03-3283-3536

参加費：**800 円**

定員：40 名程度(最少催行 10 名)

お申し込み方法：電話(OWS 事務局 03-5960-3545)

日本には、黒潮、対馬暖流に乗って南方から様々な漂流物が漂着します。漂着物は、遠い異国といった距離だけではなく、長時間もかけて流れ着くため、「時間と空間」の旅人です。しかし近年、その様子も私たちの生活スタイルの変化により、味わいのある「漂着物」から、プラスチックを主とする「海ごみ」へと変化してきました。今回は、とっておきの漂着物と同時に、海洋環境問題の一つである海ごみの実態を紹介し、今我々にできることついて皆さんと考えたいと思います

●COP10 100日前緊急イベント 海の生物多様性を考える

スウェーデン環境党･欧州議会議員/『沈黙の海』著者

イサベラ・ロヴィーンさん来日シンポジウム

魚が食べられなくなる？～漁業と流通、消費を問い直す～

http://parc-jp.org/info/2010/100703sakanasympo.html

日時：2010年7月3日(土)　13:00～17:30

会場：慶應義塾大学　三田キャンパス　南館地下４階ディスタンスラーニングルーム

http://www.keio.ac.jp/ja/access/mita.html

参加費：無料

お申込み方法：①お名前②ご所属③ご連絡先（メールアドレスあるいは電話番号）を明記の上お申し込みください：sakana0703@gmail.com

共催：EU Studies Institute in Tokyo (EUSI)、持続可能なスウェーデン協会、グリーンピース・ジャパン、アジア太平洋資料センター(PARC)、

協賛：パタゴニア日本支社

プログラム(予定)

13：00　あいさつ　田中俊郎氏（慶應義塾大学教員／EUSI 所長）

13：05　イサベラ・ロヴィーン氏講演（逐次通訳）「水産資源は急速に枯渇している～EU の事例から」

14：05　勝川俊雄氏（三重大学）講演「日本の漁業管理の現状と課題」
14：20　アジア太平洋資料センター制作 DVD 上映「食べるためのマグロ、売るためのマグロ」
14：55　花岡和佳男氏（グリーンピース・ジャパン）講演「水産物流通の現状と問題点」
15：25　アジア太平洋資料センター制作 DVD 上映「食卓と海　水産資源を活かし、守る」
16：00　大野一敏氏（船橋市漁業協同組合）講演「漁業から見る海洋環境保全の必要性」
16：15　パネルディスカッション
「いかに管理し、いかに食べるか」　モデレーター：井田徹治氏（共同通信社）
EU、日本、国際的な水産資源管理の現状と課題、海洋環境保全の必要性、海洋保護区などについて、「いかに食べるか」では、消費者に対してどう魚を食べるのかということ(日本の水産物輸入によってどんな影響が起きているのか、翻って地場の漁業者が獲った魚の市場が奪われてしまっているのではないかなど)を議論します。
魚や貝、海藻など、海からもたらされる恵みは、古くから私たちの食卓を支えてきました。しかし、こうした水産資源が枯渇しつつあることが世界中で懸念されています。本来、これらの資源は自然の営みの中で子孫を残し、再生産し続けます。しかし、その力を超えるほどの量が獲られ続けてきました。同様に魚や貝が生育できる環境も失われています。
国連食糧農業機関は、世界の水産資源の4分の3が限界まで獲られてしまっていると警告、2015年に不足する魚介類の量は世界でおよそ1,100万トンと予想しています。これは、日本で1年間に消費する魚介類とほぼ同量です。実際にこれだけの魚介類が不足すれば、価格の高騰は避けられません。タンパク質を魚介類に依存する世界の貧困層への影響は深刻ですし、日本の食卓にとっても人ごとではありません。
2010年10月、名古屋で COP10(生物多様性条約第10回締約国会議)が開催されます。私たちの暮らしを支える豊かな生態系を保全し、将来にわたって利用し続けていくために、締結国が話し合います。
その100日前にあたる7月3日(土)に、スウェーデンから、ヨーロッパの資源枯渇を告発したジャーナリストであり、現在は欧州議会議員として水産行政の改革に関わっているイサベラ・ロヴィーンさんをお迎えし、「魚を食べ続けていくために」という視点から海の生物多様性を考えるシンポジウムを企画しました。
クロマグロの禁輸が話題になり、水産資源の枯渇が懸念されていることは身近な話題になりつつあります。しかし、どのような生産・流通・消費構造の中でそうした状況が起こっているのかということはあまり知られていません。本シンポジウムでは、この点にもスポ

ットをあて、私たちの画一的な消費のあり方自体が、乱獲や環境に負荷をかけるような養殖に結びついていることを明らかにしていきます。
また、持続可能な漁業を行なう事例も紹介しながら、そうした漁業を支える「持続可能な水産物消費」についても考えます。
++++++++++++++++++++
■スピーカー、モデレーター紹介
Isabella Lovin （イサベラ・ロヴィーン）スウェーデン環境党・欧州議会議員
1963年生まれ、ストックホルム在住。消費者・食・環境の問題を専門に扱うジャーナリストとして活躍。2007年夏にスウェーデンにて出版した『沈黙の海 ー 最後の食用魚を追い求めて』では、乱獲によってスウェーデン近海やヨーロッパ・世界における水産資源が枯渇に瀕していることに警鐘をならし、人々の関心を大きく高めることとなった。2007年ジャーナリスト大賞、2007年環境ジャーナリスト賞を受賞。2009年6月の欧州議会選挙に環境党から立候補し当選。
勝川俊雄 (かつかわ・としお)三重大学生物資源学部准教授
1972年、東京生まれ。東京大学農学生命科学研究科にて博士号取得した後、東京大学海洋研究所助教を経て、現職。研究テーマは、水産資源を持続的に利用するための資源管理戦略の研究、希少生物保全のための持続性の評価など多岐にわたる。現在は、ノルウェー、ニュージーランド、オーストラリア、米国などの漁業の現場を周り、世界各国の資源管理制度の比較研究に力を入れている。業界紙、ブログなど様々なメディアで、日本の漁業改革の議論をリードしてきた。日本水産学会論文賞、日本水産学会奨励賞を受賞。
花岡和佳男（はなおか・わかお）国際環境 NGO グリーンピース・ジャパン 海洋生態系問題担当
2000年から2002年までアメリカ・フロリダでマナティーやウミガメの保護活動に参加し、その後マレーシアにてマングローブを伐採しないエビの養殖施設の立ち上げに貢献。2007年よりグリーンピース・ジャパンに所属し、沖縄ジュゴン、違法漁業、捕鯨、過剰漁業といった海の生物多様性を守るキャンペーンを展開している。2008年の国際捕鯨委員会（IWC）では、約30年ぶりに会場内での NGO に発言権が与えられ、30を超える NGO の代表としてスピーチを行い、各国政府に実質商業捕鯨の中止を訴えた。国内では現在、太平洋クロマグロの過剰漁業を問題視し、漁港や市場などを巡り調査を行ったり、過剰漁業や漁業管理についてのシンポジウムを開催するなどして、海洋保護区の設立に向けた活動に注力している。

大野一敏（おおの・かずとし）船橋市漁業協同組合代表理事組合長
江戸時代から続く網元の家に生まれ、６０年にわたり東京湾で漁業を営む。経済成長の中で海の環境が変化することに危機感を覚え、サンフランシスコ湾保全運動などを研究。湾はかけがえのない天然資源であるという信念のもと、埋め立て反対運動などを通し、東京湾最奥に残された干潟、三番瀬の保全に関わる。著書に『東京湾で魚を追う』。
井田徹治（いだ・てつじ）共同通信科学部編集委員
1959年12月東京生まれ。1983年、東京大学文学部卒、共同通信社に入社。1991年、本社科学部記者。2001年から2004年まで、ワシントン支局特派員(科学担当)。現在、同社編集委員。環境と開発の問題を長く取材、気候変動に関する政府間パネル総会、気候変動枠組み条約締約国会議、ワシントン条約締約国会議、環境・開発サミット(ヨハネスブルグ)、国際捕鯨委員会総会など多くの国際会議も取材している。著書に「サバがトロより高くなる日　危機に立つ世界の漁業資源」（講談社現代新書）、「ウナギ　地球環境を語る魚」（岩波新書）、「生物多様性とは何か」（岩波新書）など。
■上映作品紹介
「食べるためのマグロ、売るためのマグロ」2008年　31分
http://parc-jp.org/video/sakuhin/maguro.html
マグロを切り口に、グローバルなフードビジネスが私たちの食卓や環境に与えている影響を探り、「マグロが食べられなくなる」ような状況が生み出された背景に迫る。
「食卓と海　水産資源を活かし、守る」2009年　34分
http://parc-jp.org/video/sakuhin/sakana.html
マグロだけでなく水産資源全体の枯渇が世界的に懸念される中、資源を利用しながら保全するコミュニティの実践を追う。「持続可能」な漁業のあり方を考えると同時に、海の恵みを長く楽しむための「食べ方」を考える。

●　魚のいない海 ～次世代に海を引き継ぐために～

「海から魚が消える・・・」　日本人は世界でも魚をよく食べる国民です。私たちの国はその需要を支えるため、国内生産と同量の年間約600万トンもの魚を国外から輸入し、世界約40カ国と漁業協定を結ぶ事によって遠く離れた海から魚資源を獲得しています。しかし、その世界中の魚資源の現状について私たちはどのくらい理解しているのでしょうか？
もし本当に世界で魚が減っているのであれば、それは私たち日本人にもその責任があるのではないでしょうか？私たち日本人を含め世界の人々が、次世代にこの資源を引き継ぐ事が出来ないとしたら、これは重大な問題です。日本財団は、『次世代に海を引き継ぐ』事業の一環として、2009年よりシンポジウム、セミナーなどを通してこの魚資源の問題に関わ

ってきました。国境のない海において魚の資源管理は一国だけの努力ではなく、国際的な連携による取り組みが求められています。その中で魚の消費大国に住む私たちが世界にアンテナを張り巡らせて、正しく現状を理解することが問題解決の第一歩だと考えています。魚の問題は国際的な問題であると同時に、一般家庭の食卓を守るという身近な問題でもあります。海を守り、私たちの食卓を守る。そして次世代に豊かな海を引き継ぐために、食べるべきか、それとも、食べざるべきか。食べ続けたいなら知っておくべき世界の魚資源の事実を把握していただき、今後、どのような行動をとっていくのかを考える契機となれば幸いです。

**********《プログラム詳細》**********

魚のいない海～次世代に海を引き継ぐために～

司会　坂本　咲子

日　　時：平成22年7月6日(火)　13：00～16：30

場　　所：東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル 1階 バウルーム

http://www.nippon-foundation.or.jp/org/profile/address.html

主　　催：日本財団

協　　力：笹川日仏財団、東京大学海洋アライアンス

プログラム

13：00－13：10・・・開会のあいさつ（笹川陽平　日本財団会長）

13：10－15：30・・・講　演　（同時通訳あり）

*フィリップ・キュリー　フランス外務省開発研究局(所長)兼
地中海および熱帯地域の漁業研究センター(所長)

*ダニエル・ポーリー　ブリティッシュコロンビア大学（教授）

*八木　信行　東京大学大学院農学生命科学研究科(特任准教授)

15：40－16：30・・・質疑応答

フィリップ・キュリー、ダニエル・ポーリー、ヴィリー・クリスチャンセン、八木　信行

【詳細】http://www.nippon-foundation.or.jp/org/news/2010062301.html

参加ご希望の方は右記よりお申し込み下さい。https://fs220.xbit.jp/t626/form2/

【お問い合わせ先】 日本財団シンポジウム事務局 TEL : 03-5577-4692（月～金 10 : 00-18 : 00）

●水産業と海辺の暮らしは今　～社会経済の変化の中にある水産業の変貌を探る～

東京海洋大学大学院海洋管理政策学専攻　設立2周年記念シンポジウム

日時：2010年7月7日（水）13:30～17:30

場所：東京海洋大学　楽水会館　大会議室（鈴木善幸記念ホール）

住所 〒108-8477　東京都港区港南4-5-7（最寄駅：品川駅／天王洲アイル駅）
参加費：無料（事前お申込み不要）
お問い合わせは　東京海洋大学総務課 Tel. 03-5463-0354
プログラム
13:30-13:40 開会挨拶 松山　優治 東京海洋大学学長　来賓　　文部科学省、水産庁
I部　講演
13:40-14:10 今宵も晩酌の友は鮮魚　スーパーの魚売り場で漁村を想う
　　ラズウェル　細木　　氏（ 漫画家）
14:10-14:40 浜の元気は女性の力で
　　古川 由紀子　氏（合同会社 佐賀市漁村女性の会 代表）
14:40-15:10 里海はいま～**20**年間の取材を経て～
　　瀬戸山　玄　氏（ドキュメンタリスト・記録家）
II部　東京海洋大学海洋管理政策研究の紹介
15:30-16:30　海洋**ESD-**持続可能な海洋沿岸利用の基盤構築をめざして
　　川辺みどり　　東京海洋大学 准教授
III部　調査･研究をとおしてみた水産業･漁村の展望
15:30-16:30
1) 日本に起きている漁業構造の変化　　馬場　治　東京海洋大学 教授
2) 北方四島の現状と道東の漁業　　末永　芳美　東京海洋大学 教授
3) 日本の離島はどうなっていくのか　　工藤　貴史　　東京海洋大学 准教授
16:30-17:30 総合討論
17:30 閉会の挨拶　　賞雅　寛而　大学院 海洋科学技術研究科科長
主催：東京海洋大学　　後援：楽水会
★終了後、懇親会を開きます。事前申し込みを６月30日まで電子メールかファックスでお願いいたします。（懇親会参加費：一般 4000円・学生 2000円）懇親会のお問い合わせ・お申し込み　**t-sasaki@kaiyodai.ac.jp**　　**FAX 03-5463-0631**

●海洋アライアンス・シンポジウム/第5回東京大学の海研究
【地球システムとしての海】

日時：2010年7月12日（月）午前10時より（午前9時半から受け付け開始）
場所：東京大学理学部「小柴ホール」　　〒113-8654 文京区本郷7-3-1
　　http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_00_25_j.html
主催：東京大学 海洋アライアンス
参加費：無料（先着200名）（但し，懇親会参加費は3000円程度の予定）
参加登録：海洋アライアンスホームページから御願いします．http://www.oa.u-tokyo.ac.jp
~~~　プログラム　~~~
~~~

10：00　企画の趣旨　　副機構長　木暮一啓（大気海洋研究所）
10:10-　―大気から深海までを探る―
・気候システムにおける海洋　　渡部雅浩（大気海洋研究所）
・深海の雲と微生物　　砂村倫成（理学系研究科）
・耳石から魚の生活史を探る　　黒木真理（総合研究博物館）
13:00-　―海を知る技術―
・海洋環境モニタリングのための新技術開発　　福場辰洋（生産技術研究所）
・海洋エネルギーの利用実用化にむけて　　高木　建（新領域創成科学研究科）
15:10-　―世界の海を知るために―
・PEMSEA Youth Forum 報告　　持留宗一郎（公共政策大学院）高砂友里子（学際情報学府）神山龍太郎（農学生命科学研究科）
・国連海洋法条約における海洋科学調査とは何か　　許　淑娟（公共政策大学院）
・「うみあるき」ICT プラットフォーム　　松浦正浩（公共政策大学院）
16:50　挨拶　　機構長　浦 環（生産技術研究所）
17:30-　懇親会（山上会館地階食堂）
【交通】
地下鉄：南北線　東大前駅（徒歩1分），千代田線　根津駅または湯島駅（徒歩8分），丸ノ内線・大江戸線　本郷三丁目駅（徒歩8分）
都バス：御茶ノ水駅（JR 中央線、総武線）より，茶51駒込駅南口又は東43荒川土手操車所前行，東大（赤門前，正門前，農学部前バス停）下車
【問い合わせ先】
海洋アライアンス事務局　野村英明（大気海洋研究所）〒277-8564　千葉県柏市柏の葉5-1-5
TEL/FAX．04-7136-6417　E-mail: office@oa.u-tokyo.ac.jp

●シンポジウム「海の生物多様性と海鳥」（IBA～陸から海へ）

概要：生物多様性条約（CBD）締約国会議において、沿岸、海洋の保全については、「少なくとも10％が実効的に保全されること」という目標が定められています。本年10月に名古屋市で開催される第10回締約国会議（COP10）で決定される2011-2020年の長期目標においても、2020年までに保護地域により保全されることが盛り込まれ、その数値目標が議論される見込みです。しかし、日本国内においては、周囲を海に囲まれ多種多様な海の生物の生息環境を抱えているにもかかわらず、海洋保護区の取り組みはまだほとんど進んでいないのが現状です。

日本野鳥の会は、野鳥を指標とした重要な生息地（IBA）を保全するためのリスト作成とその保護区化の運動を1995年に開始し、陸域のリストを2004年に公表しました。そして今年からマリーン IBA（海の重要野鳥生息地）の選定に着手しています。マリーン IBA は、海鳥を指標にした海洋保護区選定のための候補地リストです。このリストを生かし海の生物多様性を守っていくためには、実効性のある海洋保護区の制度や取り組みを考えていく必要があります。

シンポジウムでは、日本の海鳥や海洋保護区の現状を共有し、海鳥保護のため、そして海の生物多様性保全のための、海洋保護区の実現に向けて議論を深めていきます。

■日時：2010年7月24日（土）13：00～17：30

■会場：立正大学大崎キャンパス 11号館1151室（東京都品川区大崎4-2-16）

http://www.ris.ac.jp/guidance/cam_guide/

■主催：財団法人　日本野鳥の会　■共催：立正大学地球環境科学部

■参加：無料。当日参加可。当日参加も可能ですが，参加者数把握のため、事前の申込をお願い致します.

E-Mail にて，下記の要領でお申し込みください．宛先：hogo@wbsj.org　件名：シンポジウム参加申し込み

※このシンポジウムは、三井物産環境基金の助成を受けています。

■スケジュール

12：30～　受付開始

13：00～　開始

13：15～

第1部　基調講演「海鳥と生物多様性」

綿貫　豊（北海道大学大学院水産科学研究院・准教授）

13：45～　**第2部　海鳥のおかれている現状**

①世界の海鳥の現状

佐藤　真弓（NPO 法人バードライフ・アジア・研究員海洋・海鳥保全担当）

②保護の取り組み（エトピリカの事例）

片岡　義弘（NPO 法人エトピリカ基金・理事長　片岡義廣）

③マリンレジャーによる撹乱（ベニアジサシの事例）

（財団法人　山階鳥類研究所）

④コロニー周辺での海鳥の状況（カンムリウミスズメの事例）

山本　裕（財団法人日本野鳥の会　自然保護室）

⑤洋上風力発電の影響

浦　達也（財団法人日本野鳥の会　自然保護室）

15：30～　**第3部　海洋保護区の現状と課題**

①日本における海洋保護区の現状

前川　聡（財団法人世界自然保護基金ジャパン　自然保護室・海洋担当）

②海洋保護区の課題と求められること

向井　宏（海の生き物を守る会・代表）

③海洋保護区実現のための制度について

荒牧まりさ（環境省自然環境局自然環境計画課　サンゴ礁保全専門官）

④地域と海鳥の共存に向けて

篠木秀紀（財団法人日本野鳥の会　サンクチュアリ室）

16:40～17:30　**第4部　ディスカッション**

海鳥の保護と海の生物多様性保全について

●2010年第３回コーラル・ネットワーク会員勉強会
「サンゴと遊ぼう！サンゴの骨格染めに挑戦！」

青い海！白い砂！海の中にはたくさんの魚達がいます。そして魚や生き物達が集まってくるのが、美しいサンゴ礁です。このサンゴ礁を作っているのは、「サンゴ」です。サンゴは実は生き物で、白くて硬い骨格を持っています。よく、沖縄の海岸やお土産屋さんで見かける、白くてポツポツと穴が空いている、あれですね。手に取ってみると、一つ一つ色々な模様があって、とても不思議です。今回はこのサンゴが作る骨格の模様を「こすり出し」という方法で布に写し取る、染め物に挑戦します。デザインはあなたのアイデアとサンゴとのコラボレーション、世界にひとつだけのオリジナル作品です。

サンゴ礁の海から遠く離れた東京ですが、サンゴにふれて、遊ぶことで、海の命のにぎわいを感じることが出来るかもしれません！

日時：2010年7月24日（土）13時半～16時半（13時15分開場）

場所：環境パートナーシップオフィス(EPO)内　エポ会議室

(東京都渋谷区神宮前5-53-67コスモス青山 B2F)

※表参道駅 B2出口より徒歩5分、渋谷駅東口から徒歩10分

http://www.geic.or.jp/geic/intro/epo_map.pdf

主催：CN 会員勉強会プロジェクトチーム　　http://coralnetwork.jp/

講師：小林惠美（コーラル・ネットワーク一般会員）

渡辺未知（コーラル・ネットワーク一般会員）

対象：コーラル・ネットワーク会員・非会員問わず広く一般の方

小学生以上（小学生の場合は保護者同伴のこと。親子でのご参加歓迎します。）

・海が好きな人

・サンゴに興味がある人

・夏休みの宿題に困っている人？！

参加費：300円（コーラル・ネットワーク会員は無料）

（材料を会場でお求めの場合は別途費用がかかります。）

定員：２０名

持ち物：染めるもの

白い布（棉がベストです）で出来た、染めてみたいもの。

例）T シャツ、エコバッグ、バンダナ、てぬぐい、ふろしき、ティッシュケース

染めるものを忘れてしまった方には、会場で有料（100円程度）にてお譲りします。

申込・問合せ：必要事項をご記入のうえ、メールで。　moushikomi@coralnetwork.jp

必要事項　※メール件名：サンゴ骨格染め申込み　※本文・お名前（ふりがな）　・お子様連れの場合、お子様のお名前（ふりがな）と学年　・メールアドレス　・コーラル・ネットワーク会員はその旨を、コーラル・ネットワーク　非会員の方は何でお知りになったかを

折り返し担当よりご案内します。　（ご連絡までに数日いただくこともあります）

申込締切：７月２２日（木）正午　定員になり次第締め切ります。お早めに。

コーラル・ネットワーク http://coralnetwork.jp/

リーフチェック in ジャパン　http://www.reefcheck.jp/

●日本人の生業と自然再生

自然再生のめざす姿　生業の再生／暮らしの再生／自然の再生

場所：東京農業大学　世田谷キャンパス１号館３１４号室（定員２００名）

主催：自然再生を推進する市民団体連絡会

2010年７月27日　（火）９時～10時30分　（～12:00ディスカッション）

講師：

宮林茂幸　東京農業大学農学部森林総合科学科林政学研究室教授

渋澤寿一　樹木・環境ネットワーク協会　理事長

竹田純一　里地ネットワーク／山村再生支援センター事務局長

木村　尚　海辺つくり研究会事務局長「THE！ 鉄腕！ DASH!!」 ダッシュ海岸監修者

山道省三　全国水環境交流会代表理事／東京農業大学客員研究員

吉野奈保子　森の“聞き書き甲子園”実行委員会事務局

海の再生

①生業と海

②海の生物多様性と恵み

③流域と浜辺、暮らしの自然再生

申込方法：saisei@satochi.net　あてにメールでお願いします。

●スノーケリングを楽しもう

場所:三浦半島　＊集合解散:新宿駅

日時:7月10日(土)～11日(日)

参加者募集:小学生17,500円(16,000円)、中学生19,500円(18,000円)※()内は会員価格

対象:小学生～中学生

主催:野外教育事業所ワンパク大学　03-3204-8098

スノーケルとマスクを使って、海の中をのぞいてみよう！夏休み前にスノーケリングの基本を身につけよう！

野外教育事業所　ワンパク大学

【東海】

●「味わって知る　わたしたちの海」

赤須賀漁協と長良川河口堰見学

主催：伊勢・三河湾流域ネットワーク

【北陸】

●映画「祝の島」上映会と纐纈あや監督＆刈羽女性の対話

7 月 18 日 19 日、映画『祝の島』新潟県の 3 会場で上映＆監督と刈羽女性の対話。

市民映画館をつくる会

18 日（日）
13：00～　十日町情報館視聴覚ホール（新潟県十日町市西本町 2 丁目）
18：30～　三条市中央公民館音楽視聴覚室（新潟県三条市元町 13-1）
19 日（月祝）
13：00～　長岡市立中央図書館 2F 講堂（新潟県長岡市学校町 1 丁目 2 番 2

４．事務局便り：

●この「うみひるも」は「海の生き物を守る会」のメールマガジンです。配信が迷惑と思われる方は事務局までご連絡ください。
●企画案などその他なんでも本会の活動に関することは、事務局あてにお寄せください。
●このメールマガジンは、毎月 1 日と 16 日の 2 回発行の予定ですが、都合によって遅延や中止もあります。配信を希望する方、送りたい方がありましたらアドレスをお知らせください。また、パソコンを使えない環境の方には印刷体でもお届けします。その場合は、郵送料をご負担していただくことがあります。
●このメールマガジンは転載自由です。海の生き物に関心を持っている方に広く読んでいただくために転送をお願いします。ただし写真を別の目的で使用する場合は事前にご連絡ください。海の生き物や守る運動についての情報など、また各地で行われている海の生物の観察会、研修会、その他の行事に関する情報もお寄せください。「うみひるも」のバックナンバーは、ホームページからダウンロードできます。
●本会は自然観察会や講演会を各地で実施しています。各地で開催を希望される方、開催をお手伝いできる方は、ご一報ください。また、各地の団体との共催も行います。ごいっしょに講演会や観察会をしたいと思われる団体からも提案をお受けします。
●本会への寄付をお寄せください。寄付も会費も同じ銀行口座「ゆうちょ銀行　口座番号：１０６１０－６６７３０２１　海の生き物を守る会」へお送りください。なお、送金される場合は、送金の内容について事務局にお知らせ下さい。

５．編集後記

今年第 1 回目の観察会は雨に祟られましたが、そのためもあって講演会は時間を大幅に延長して熱演していただきました。参加者も十分満足していただけたと思います。熱心に講演していただいた倉谷さん、準備をお手伝いいただき、内海富士夫展の解説をしていただいた久保田さんには、あらためてお礼申し上げます。また、雨の中参加していただいたみなさま、どうもありがとうございました。次回は、北海道を予定しています。ぜひお近くの方はご参加下さい。

「うみひるも」の記事にといろんな方から情報をお寄せいただき、ありがとうございます。ただ、編集が配信前のあわただしい中で行うことになり、お寄せいただいた情報をすべて掲載できなかったこともしばしばあり、たいへん申し訳ありません。情報をお寄せい

ただいたのに掲載されなかった方には、お詫びのしようもありません。まことに申し訳ありませんでした。これに懲りずにまた情報をお寄せ下さい。（宏）

海の生き物を守るためになにかしたい！というあなたに！

会員募集中です！

会員は本会の趣旨に賛同できる個人・団体とします。会費は個人 2,000 **円／年、団体** 20,000 **円／年。匿名による参加も可能です。会員は、当会の名前を使って各地で海の生物とその環境を保護・保全する活動を行うことができ、そのための助成金申請をすることができます。活動は当会の発行するメールマガジンなどを通して広く通知されます。入会希望の方は、事務局** hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp **（向井）まで、氏名、住所、メールアドレスをお知らせください。**

メールマガジン『うみひるも』第 62 号
2010 年 7 月 1 日発行
発行＆編集人「海の生き物を守る会」
代表　向井　宏
〒606-8244　京都市左京区北白川東平井町 23-1
グリーンヒル北白川 23
TEL&FAX:075-703-7205; 090-8563-1501　メールアドレス：hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp
ホームページ URL：http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html
銀行口座：ゆうちょ銀行　口座番号：１０６１０－６６７３０２１　海の生き物を守る会